

社会自立に向けた学習指導法の確立

『高等学校における次世代の学習ニーズを
踏まえた指導の充実事業』

中間報告書

奈良県立大和中央高等学校 定時制課程



目 次	
はじめに	p 2
本研究の概略図	p 3
本研究に関わる組織図	p 4
I 今年度の進捗状況	p 5
II 先進校視察報告	
1 島根県立瀬摩高等学校	p 7
2 鳥取県立米子白鳳高等学校	p 8
3 長崎県立佐世保中央高等学校	p 9
4 佐賀県立厳木高等学校	p10
5 佐賀県立太良高等学校	p11
III 令和元年度における取組	
1 「ICT機器を活用した学習支援」	p13
2 「通級による指導」	p16
IV 検討会議	p20
V 次年度に向けての課題と取組	p21

はじめに

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」の取組にあたって

本校は県立唯一の通信制課程を併設している定時制課程の多部制単位制高等学校である。「学びたいときに学べる学校」、「学ぶ必要が生じたときに学べる学校」として平成 20 年に開校した。多様なニーズや生活スタイルに合わせた幅広い履修形態の中で、生徒は個々のライフスタイルに合わせて、無理のないペースで自らの能力を伸ばしている。近年は、不登校を経験した生徒が半数以上を占め、外国にルーツをもつ生徒、貧困による学習困難並びに問題行動を抱える生徒の入学も増加している。学習面だけでなく多様な教育的ニーズを抱える生徒への学習指導・支援の確立が今後の課題となっている。

本研究のねらいは、多様な教育課題を抱える生徒の社会自立に向けた「ICT機器の活用」及び障害による学习上又は生活上の困難を改善克服し自立を図るための「通級による指導」の学習指導法を確立することである。

具体的には次の2つの取組を行う。

1 「ICT機器を活用した学習支援」

基礎学力の定着をタブレット端末と学習アプリを活用して進める。生徒自身が学力が付いたことを体感することにより、学習することへの喜びや達成感、自信が生まれてくる。その自信と達成感は、学校生活や様々な場面で自己肯定感や自尊感情を高めることにつながる。こうした自己肯定感や自尊感情の高まりは、卒業後の生徒の生活向上に役立つものと考えられる。

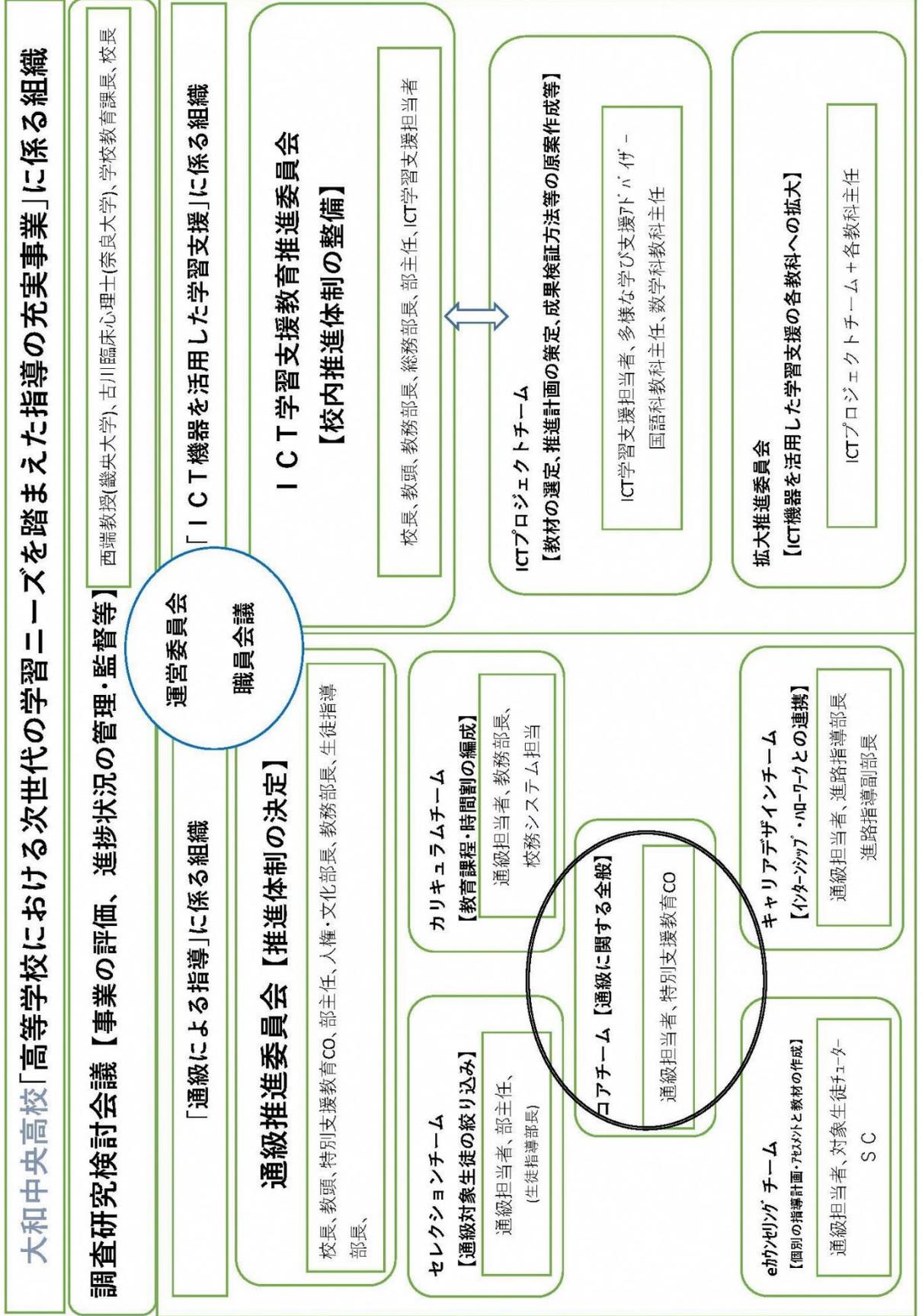
学習アプリを活用した授業形態は一斉授業とし、生徒が自らの到達度に合わせて教材を選択し、個々の学習課題に取り組む。授業においては、教員が机間巡視による直接指導を行い、また家庭学習等においては、メールのやりとりによる間接指導で対応する。

2 「高等学校における通級による指導」

学習や社会的適応に困難を抱える生徒が社会でよりよく活動するために取り組んだ内容を検証し、指導方法の在り方を検討する。本校では障害等による学習面や生活面、対人関係のつまずきだけでなく、これまでの失敗経験や苦手意識の積み重ねによる自尊感情の低下や意欲の乏しさが見られる生徒が少なくない。これらの生徒が学校生活や卒業後の自立と社会参加を積極的に行えるよう、効果的な校内体制を整備するとともに、生徒の自己理解、自尊感情の向上、不注意や衝動性に対する指導・支援などの在り方について研究を進めたい。

本研究は、この二つの研究を柱に、教員が一体となり、変化する現代社会の中で、様々な教育的ニーズをもち、学校生活に課題を抱えている生徒や卒業後の生活に不安や困難を感じる生徒の、社会自立を可能にする学習指導法の確立につなげるためのものである。





I 今年度の進捗状況

		I C T機器を活用した学習支援	通級による指導
6月3日	月	文科省、「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」(以下「事業」とする。)の公募	
6月7日	金		教育セミナー2019(教育研究所)にて「本校の通級による指導について」の実践発表
6月14日	金		特別支援教育体制整備事業第1ブロック連絡協議会第1回研修会で「本校の通級による指導について」の実践発表
6月17日	月		校内研修会の実施「通級による指導について」
6月21日	金	県教委(担当:学校教育課)から文科省へ「事業」の企画提案書を提出	
7月17日	水	文科省から、「事業」委託の内定	
7月29日	月		通級連絡会を開催(学校教育課4名、教育研究所1名、本校職員6名)
7月31日	水	県教委(担当:学校教育課)から文科省へ事業計画書を提出	
8月29日	木		教育研究所「高等学校における通級による指導研修講座」で「通級による指導について」の実践発表
9月19日	木	本事業担当者打ち合わせ(学校教育課2名、本校職員6名)	
9月20日	金	文科省と「事業」の委託契約	
9月25日	水	検討会議に係る委員就任依頼の発出	
10月30日	水	「事業」用タブレット購入(25台) 動作確認	
11月1日	金	「事業」用学習支援ソフト契約	
11月1日	金	「事業」多様な学び支援アドバイザー内定	
11月18日	月	「事業」第1回検討会議	
11月25日	月		兵庫県高等学校における通級による指導実践研究協議会への参加
11月27日	水		島根県立瀬摩高校を訪問
11月28日	木	鳥取県立米子白鳳高等学校を訪問	
12月4日	水	「事業」用学習支援ソフト業者が来校し、タブレット端末による学習の様子を参観	
12月20日	金	Wi-Fiの点検及び教室内のアクセスポイント設置に向けた準備	
1月14日	火	学習支援ソフト業者から学習支援ソフトの効果的な活用方法について助言とアドバイス	

1月17日	金		奈良大学 古川 藍 臨床心理士による 通級による指導の授業参観及び指導 助言
1月31日	金	畿央大学 西端 律子 教授による 授業を撮影したビデオの視聴と指 導助言	
2月3日	月		長崎県立佐世保中央高等学校を訪問
2月4日	火	佐賀県立厳木高等学校を訪問	佐賀県立太良高等学校を訪問
2月14日	金	「事業」第2回検討会議	

II 先進校視察報告

1 島根県立邇摩高等学校 令和元年 11 月 27 日(水)

(1) 学校の取組

- ア 全日制課程の総合学科学年制、二学期制の学校である。「農業」「ビジネス」「生活」「文化」「福祉」の5つの系列を有する。平成26年4月に学校活性化プランを策定し、魅力と活力にあふれる教育活動を展開している。
- イ 1年生より学校設定科目でより専門性を高める内容や、座学だけでなく実習を通して確実に知識と技能を習得できる。きめ細かな学習形態と少人数指導を行っている。
- ウ 個々の生徒にとって魅力ある充実した高校を目指して、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を行い、すべての生徒にわかる・できる授業を実践している。
- エ 特別支援教育の充実を掲げている。平成26年度より文部科学省モデル事業を受託し、平成30年度より「高等学校における通級による指導(以下「通級による指導」とする。)」を本格実施している。
- オ 「通級による指導」は、教科指導の延長としての学習活動ではなく、自立活動の「人間関係の形成」や「コミュニケーション能力の育成」を中心とした課題として取り組んでいる。
- カ 「通級による指導」の教科名は「煌めく羅針盤」である。指導内容は次のとおりである。

	主な指導内容	授業時間数・単位数
1年生	・2・3年生の自立活動に向けての事前指導・障害の認識や自己理解を促す。 ・感情のコントロールやストレス対処のスキルを習得する。	課外(各生徒3回程度の体験受講)授業時数、単位数として含めない。
2年生	・LST(ライフスキルトレーニング)の実施 ・自己や他者を理解する。 ・効果的なコミュニケーションのスキルを習得する。	選択授業「煌めく羅針盤」 通年70時間(2単位)
3年生	・キャリアトレーニングの実施 ・卒業後の社会生活に必要な知識やスキルを習得する。	選択授業「煌めく羅針盤」 通年70時間(2単位)

- キ 「煌めく羅針盤」は2年生からの選択となるが、教員は生徒出身中学校との引継ぎをし、4月・7月の懇談会で保護者に内容など周知し、受講を希望する場合は丁寧な説明を行う。教員は、生徒の実態把握に努め、職員全員による生徒の共通認識と3回程度の体験受講の後に、受講確認を生徒本人・保護者から得る。個別の教育支援計画・自立活動指導計画を作成する。

(2) 参考とする点

ア 学習内容の工夫

机上の学習だけでなく、個別の課題克服のための実習が多い。生徒には、時間を意識し活動力(計画性、行動力)を培わせる。生徒の卒業後を見据え、作業を段取りし、指示された内容を時間内にこなすことを繰り返すことで、活動のパフォーマンスが上がり、自己肯定感と自信が養われる。本校でも生徒に達成感を味わえる課題を再考察し、設定をしていきたい。

イ 職場体験実習の実施

3年生には職場体験実習が取り入れられている。2年生から個別課題に取り組みながら、進路や将来設計を描かせる。職場でのコミュニケーションの取り方、面接など就労を意識した学習を経て、3年生の職場体験学習で学習の成果を発揮する。

ウ 外部支援機関との連携

生徒を支えるための地域ネットワークが学校を中心に組織されている。市の地域福祉課、発達障がい者支援センター、障がい者就業・生活支援センター、ハローワーク、相談支援事業者など、生徒に必要な外部支援機関との関係づくりを在籍中に行い、卒業後の支援につなげている。

エ ICT教育の取組

在籍するすべての生徒にとってユニバーサルデザイン(以下UDと表記)を意識した授業は有効であると考え、授業実践し、教育環境を整えている。各教室にパソコンとプロジェクターが設置され、生徒にとって「わかる・できる」授業の実践をしている。授業の見通しづくり、板書、話し方、指導方法、学習環境の工夫など全職員で研修し、共通理解を図っている。

2 鳥取県立米子白鳳高等学校 令和元年11月28日(木)

(1) 学校の取組

ア 定時制課程(午前部、午後部)の総合学科単位制、二学期制の学校である。通信制課程、普通学科も併設している。「自己理解・他者理解アプローチ事業(鳥取県)」リーダー校(平成27年、28年)として研究を進め、平成29年度から平成31年度には、「高等学校における特別支援教育充実事業(文部科学省)」として通級指導を導入展開し、先進的研究で成果を上げている。

イ 自身の興味・関心や進路選択などに応じて幅広く科目選択ができるよう学校設定科目が開講されている。「教育系」「自然系」「生活系」の三系統に分かれ、3年生以上は、体育、総合的な学習の時間・LHR以外は学校設定科目を選択する。

ウ 県全体で「知識基盤社会の進展、グローバル化を背景に、我が国が抱える様々な課題(少子高齢化、医師不足、協働的な学びの実現、地域経済の活性化など)に対応するためには、ICT(情報通信技術)の利活用は必要不可欠なものとなっている。」とし、文部科学省が平成23年4月に「教育の情報化ビジョン」、平成25年6月に「第2期教育振興基本計画」を策定したことから、ICT活用教育の推進に取り組んでいる。各教室には、プロジェクターとスクリーン(移動式)が設置され、教員はタブレットを活用しながら授業を行っている。

エ 平成30年度には、「UD・合理的配慮」について、校内教員研修や大学教授講話などを通じて教員の理解共通が図られている。

オ 「通級による指導」は、平成30年後期より実施している。主にコミュニケーションなどが苦手な生徒を対象としている。生徒本人・保護者からの申し出があった場合には、受講対象となる。教科名は「ライフスキル」である。自立活動の位置づけで、前期1単位、後期1単位(半期認定科目)とし、2年間で上限4単位とする。平成30年度は3名、令和元年度は2名が受講している。

カ 「ライフスキル」は、教員2名のチームティーチングで行い、必要に応じて、LDなどの専門員などの外部専門家の協力を得る。学習内容としては、自己理解、コミュニケーション能力育成、生活スキル育成がある。

キ 「ライフスキル」の対象生徒は、1年生の入学時中学校からの引継ぎを経て、外部専門家の協力を得ながら、教員による見立てにより候補者選定が行われる。後期より全生徒に「ライフスキル」についての説明文書を配布し、受講を希望する生徒・保護者との面談や意思確認を経て、校内会議で受講予定生徒を決定する。体験授業を受講の後、合意形成を行い、後期半ばに正式決定する。

(2) 参考とする点

ア 学習内容の工夫

すべての生徒が落ち着いて学習に取り組める授業は、UDを意識していた。また、どの生徒にもわかる授業をICT機器を活用しながら展開していた。教員は「わかる授業は、授業内容を簡単にするのではない。」ことを共通理解し、進めていた。本校でも、ICT機器を積極活用する。

イ 教室環境の整備

UDの教室環境とともに、音への反応の敏感な生徒への配慮から椅子の脚に使用済み硬式テニスボールを付け消音するなどの工夫が行われていた。

ウ 校内体制の充実

特別支援教育に関わるスタッフに、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーや特別支援教育支援員だけでなく、地域サポーターやキャリアアドバイザー、(鳥取県)西部教育局LDなど専門員なども関わっていた。

エ 教員による共通理解

「ライフスキル」担当者だけでなく、全教員の心構えとして、受容、共感、傾聴を大切にしていた。教室環境や授業内でのUDとともに「あたたかい学級集団」を作り出すことで、誰もが安心して安全に楽しい学校生活を送ることができるよう取り組んでいた。(人的環境づくり)

オ 研修体制

定期的に専門性の向上と研鑽を積める体制はあるものの、非常勤教員への研修の機会などが不十分であるとのことであった。本校でも同様の懸念があることから、研修の在り方については工夫が必要である。

カ 「通級による指導」に当たらない生徒への支援

「ライフスキル」の受講を希望する生徒以外にも対象となる生徒が在籍しており、本校でも同様な現状があるので、生徒の実態把握などの際には、考慮していきたい。

キ 多様な教材教具と授業内容

多様な教材教具が活用されており、授業展開にも様々な工夫がなされていた。本校でも教材研究・教材準備に一層力を入れていきたい。

3 長崎県立佐世保中央高等学校 令和2年2月3日(月)

(1) 学校の取組

ア 昼間部、夜間部の二部からなる定時制と通信制を併せもつ学校である。

イ 単位制で60科目以上の選択科目を準備しており、できる限り10名以下の少人数授業を実施している。

ウ 一部の科目で習熟度別授業を実施し、学び直しの授業を通して基礎学力を育成している。

エ 「通級による指導」は、自立活動の「人間関係の形成」や「コミュニケーション能力の育成」の区分や項目を中心に、「自己理解と職業理解」「場面認識」「ソーシャルスキルスタディ」「言語理解」の4つの分野を設け、これらに関連させた内容で取り組んでいる。

オ 「通級による指導」は「SWP (Self-help work-Program)」という名称で2・3年生を対象に実施している。指導内容は次の通りである。

	主な指導内容	授業時間数・単位数
2・3 年生	<ul style="list-style-type: none"> ・言語理解（漢字・語彙の学びなおし） ・コミュニケーション活動 ・ストレスマネジメント ・アンガーマネジメント ・アサーショントレーニング ・ソーシャルスキルトレーニング ・スケジュール管理 ・キャリアと自分づくり(自己理解と職業適性の理解)など 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間内での実施 ・年 70 時間・週 2 単位で継続履修も可 (選択科目に替え、在学中、最大 8 単位を卒業単位として認定) ・2・3 年生継続履修の場合は 4 単位修得

(2) 参考とする点

ア 校外体験学習の実施

「SWP」の授業の一環として長期休業中に2日間～4日間で校外体験学習を実施している。また、2年生には総合的な学習の時間の一環として、全生徒対象にしてインターンシップを3日間実施しており、「SWP」の受講生徒はその際、5日間実習を行うこともある。この校外体験学習を通して就労のイメージを作り、具体的な職業観を育成していくことができ、卒業年生の就労につなげている。

イ 校内体験学習

校外体験学習を実施する前に校内での体験学習を実施する。目的は、校外体験学習で必要となる挨拶、返事、体力などの力を養う。体験内容は、清掃、ゴミの分別などを扱う。

ウ 学習内容の工夫

「SWP」では、一般企業で求められる人材（障害者雇用も含む）の育成を目指し、次の点を意識して指導している。

- ・笑顔で挨拶ができる人物
- ・休まずに出勤できる体力・意欲のある人物
- ・自分の得手不得手（配慮内容）を理解できている人物

エ 指導上の留意点

「SWP」では、ア～ウを踏まえ、次の点を大切に指導している。

- ・会話を可視化する。
- ・人と関わるのが楽しいと思えるようにする。
- ・可能な限り自己選択をさせる。
- ・自分を客観視し、自分で気付くようにする。
- ・学習の基礎を作る。

4 佐賀県立厳木高等学校 令和2年2月4日(火)

(1) 学校の取組

ア 全日制課程の普通科単位制、二学期制の学校である。県の教育改革により、平成30年4月に新高校として再スタートし、今年度2年目を迎えた。生徒一人ひとりを見つめ、地域と一体となって、きめ細かな教育と支援を行う学校を目指している。

イ 学区枠(西部学区枠)40名と、県内全域から「学ぶ意欲のある生徒」を募る全県募集枠40名で生徒募集をしている。全県募集枠の条件は、「不登校の経験があり、やり直す意欲のある生徒」または、「発達障害があり、特性を伸ばそうとする生徒」、「高等学校中途退学者で、学び直す意欲のある生徒」のいずれかに該当する者である。県下全域からの通学を可能にするため、9時35分からの始業が特徴的である。遠方からでも始業を気にすることなく

通学ができる。また、遠方への帰宅時間を考慮し、45分の6時間授業を行っており、学期間休業などで授業日数調整を行っている。

ウ 「基礎学力の定着」「部活動の活性化」「あいさつ運動の促進」「ボランティア活動の充実」が教育活動の4本柱である。「基礎学力の定着」では、つまずきの克服と基礎学力の定着に取り組み、習得度別授業を行っている。「ボランティア活動の充実」では、学校設定科目「ボランティア」を設け、生徒に選択をさせている。学習内容は、小高連携事業(清掃や訪問など)や施設訪問などを行っている。

エ 県の「先進的ICT利活用教育推進事業」により、生徒一人一台のタブレット端末が昨年度より備品貸与されている。3年間無償保証が付与されており、各学校でシステムなども含め管理されている。タブレットは、教員が学校で一括管理し、各授業内で活用している。

(2) 参考とする点

ア 基礎学力の定着と少人数授業

習得度別の学級編成を行うことで、様々な学校生活場面で自信がもてるようになり、各学級に応じた「学びの雰囲気づくり」により生徒にとって学習内容を理解しやすい環境となっている。

イ 教育環境、学校の施設など

精神面を支援する教育相談室など、複数の教育相談室を設置している。UD化も進められており、教室環境や授業の構造化、生徒対応も職員共通で展開されていた。

ウ ICT利活用状況

各教員、授業内容によってICT機器の利用状況も活用方法も異なる。ICT機器を「基礎学力の定着」に特化した活用はしていない。数年前より教職員は、ICT機器の使い方、授業設計や活用法、活用後の効果などを教員研修で幾度となく研鑽を積んでいる。

5 佐賀県立太良高等学校 令和2年2月4日(火)

(1) 学校の取組

ア 全日制課程の普通科単位制、二学期制の学校である。平成23年度から佐賀県西部学区募集枠に加え、発達障害や不登校、中途退学者を対象とした全県募集枠を設定した。

イ 一人ひとりの適性・進路に応じたカリキュラムで学べるよう「情報・ビジネス系」「生活・福祉系」「芸術・スポーツ系」「教養・演習系」を有し、単位制を導入している。

ウ 平成21年度から平成29年度まで、文部科学省委託事業に取り組んでおり、特別支援教育の充実を図っている。

・平成21・22年度 「高等学校における発達障害のある生徒への支援」

・平成23・24年度 「高等学校における発達障害のある生徒へのキャリア教育の充実」

・平成26～29年度 「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」

エ すべての授業に共通する3つの視点「見通しをもたせる」「視聴覚な教材の活用と表現できる場の設定」「互いに学び合う場の設定」により、誰もが分かったと実感する「できる授業」を実践している。

オ すべての教室で教示物を教室後方に整理して掲示し、環境が統一されている。遮光カーテンの設置、机・椅子の音が軽減するゴムの装着等、感覚が過敏な生徒への配慮がある。

カ 「通級による指導」は文部科学省委託事業に合わせて平成26年度より取り組んでいる。個別または小集団で活動している。単位数は生徒の特性に合わせて、1または2単位で、授業名は「SST」とし生徒の心理的抵抗に配慮した表記になっている。

(2) 参考とする点

ア 学習内容の工夫

小集団の学習では生徒4人で行っている。生徒が自分の課題も認識しながら主体的に取り組めるよう生徒同士が良いところや改善点を出し合う場面を設定している。授業の最後に、振り返りプリントに取り組んでおり、個々の課題について自己評価と担当者の評価が行われる。プリントは、担任から保護者へも回覧され、授業内容が共有されている。

イ 資質向上に向けた取組

「通級による指導」について全教員で共通理解を図るために、発達障害の理解と自立活動を通じた支援についての研修を行っている。また、授業に共通する3つの視点を確認するために、教科の枠を超えて年に2回研修を行っている。

ウ 支援体制の充実

心理的サポートとして、精神科医、スクールカウンセラーによる支援の他、外部機関の訪問支援員、スクールソーシャルワーカーと連携を行っている。

Ⅲ 令和元年度における取組

本事業を実施するにあたり、従来より設置している「通級による指導」の充実のための組織に加え、「ICT機器を活用した学習支援」を推進するための校内組織を立ち上げた。事業を円滑に進めるために、多様な学び支援アドバイザー(以下アドバイザーとする。)を配置した。アドバイザーは、担当教員とともに生徒への支援や指導を行うとともに、本事業への助言を行う。

1 「ICT機器を活用した学習支援」

(1) 対象生徒について

1学級(平成31年度入学生)18名を対象とし、「総合的な探究の時間」を用い、令和元年11月から令和2年1月までの3ヶ月間、ICT機器と学習アプリによる基礎学力の向上を目指した取組を行った。1名を除き、全員が不登校(保健室登校を含む)を経験している。不登校が小学校から10年近くに及んでいた生徒もいる。

対象生徒は、全般的に基礎学力の定着に課題がある。学習に対する意欲が低く、どの学習に対しても達成感を得られないことを訴える生徒もいる。また、学習の意欲はあるが、学ぶ機会や意欲が持続しないため、45分の授業を受けるだけで疲労困憊している生徒もいる。

(2) 使用する学習アプリ

本研究では、市販の学習アプリを使用する。基礎学力の定着と向上のため、小学校4年生から中学校3年生までの「数学(算数)」と「漢字」とする。学習アプリの特長は、学習内容の定着を図るための反復学習を基本としており、四択形式で解答を選ぶ。

ア 学習アプリの特長として、

- ・達成度を視覚的に表示
- ・スモールステップでの課題設定
- ・画面表示や効果音など他感覚を活用

イ 他に機能として、

- ・弱点克服機能
- ・学習モチベーション促進機能
- ・解説を利用した自立学習機能
- ・生徒学習管理機能

(3) 事前テストの実施からみる生徒の基礎学力と学習意欲

ア 漢字(10月23日実施)

漢字検定にも対応できるよう市販問題集を使用した。漢字検定7級から漢字検定4級に相当する範囲の書き取り問題として各5問、漢字4級に相当する問題から書き取り1問、読み4問の合計20問を出題した。

正答率は、漢字検定7、6級相当の書き取りでは、10問中5点以上を獲得した生徒は、3名/15名中であった。ただし、5級は書き取りの難易度は上がるが、4級の4問は読みであり、10問中5点以上の獲得者は、4名/15名中と正答率は上がった。テスト後には、生徒たちは、漢字を書くことに対し、「一向に気持ちが向かない。」「さっぱり分からなくなる。」と口々に言い出す。「思考が停止してしまう。」と話す生徒もおり、ある生徒の書き取りは0点/15問中であった。

イ 数学(10月16日実施)

市販の数学問題集を使用した。小学校4年生以下の問題12問、小学校4年生以上の問題12問を数学科教員に依頼、抽出し出題した。

正答者数は、小学校4年以下の問題では、12問中8問以上正答した生徒は、10名/14名で

あった。12問満点の生徒も3名いたが、小学校4年生以上となると、12問中8問以上を正答した生徒は、1名であった。中には0点の生徒もおり、つまずきの境界は小学校4年生段階と考える。

エ 学習意欲（10月30日実施）

学習意欲に関して、以下の項目で5段階評価アンケートを行った。

- ・勉強が好きである。
- ・得意である。
- ・高校に入学して、勉強が好きになった。
- ・高校に入ってからテストを受けるのが好き(得意)になった。
- ・卒業するまでに、高校の勉強は身に付けたい。
- ・勉強をすれば、将来、何かの役に立つと思う。

回答から、勉強が好きか、得意であるかの項目では、「勉強は嫌いで、不得意である。」と13名/15名中が答え、残る2名は「ふつう」であった。「高校に入って、勉強が好きになったり、得意になったりした。」と回答した生徒はいなかった。

しかし、「将来何かの役に立つ(ので、勉強をしたい。）」と回答した生徒は、7名/15名おり、学習に対し、全くの興味や関心を持っていないわけではないことが分かる。自由記述からは、「とりあえず仕事(に就かないといけない。）」と、卒業後の不安を持っていたり、「将来何になりたいかわからない。」と漠然とした悩みを持っていたりする中で、学習を続けている生徒がいることが分かった。

(4) ICT機器を活用した学習の開始

対象生徒は、日常からスマホの操作やゲーム機器でのゲームなどで端末操作には慣れているためか、導入部分でアドバイスをすることは少なかった。アドレスとパスワードが記入された用紙を各生徒に渡すと、自分たちで相談しながらログインを始めた。初回では、端末操作に慣れることや、学習アプリを知る目的で自由に学習を進めさせた。2回目以降は、各生徒の目標設定を行い、到達度などを提示するようにした。「今日は、ここまですればいいの?」と興味を持って取り組む姿が見られた。

目標設定は個々の生徒によって異なるので、前回の学習の記録を記入した学習記録用紙を配布した。前回の続きをする生徒や、さらにレベルをアップさせて学習する生徒もいた。学習後にはその用紙に感想を書かせ、回収した。

学習をしている時には、TT体制で机間巡視を行った。回答を間違った生徒には、「心配しなくて良いよ、次にも同じ問題がでてくるから。」「次は2択になるよ。」と前向きになるよう言葉かけをしたり、「解説を読んで、解いてみてごらん。」と解説を一緒に見るなどをしたりと、学習姿勢の持続を支援した。

(5) 事後テストの結果

令和2年1月29日、今年度最後の「総合的な探究の時間」に令和元年10月に実施した事前テストを用い、事後テストを行った。

ア 漢字に関して

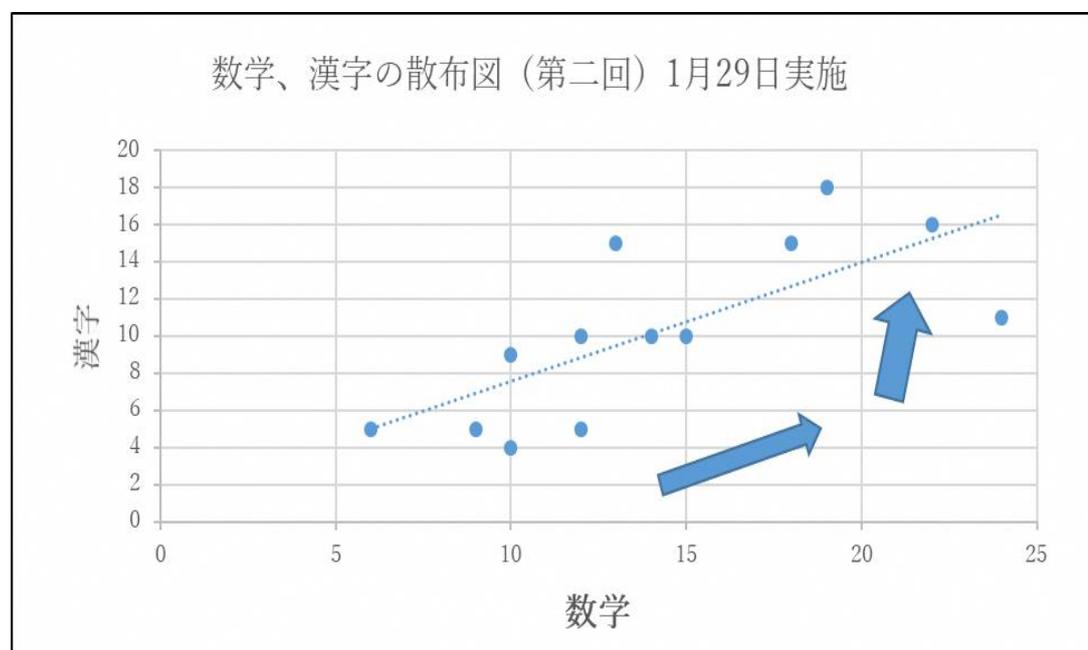
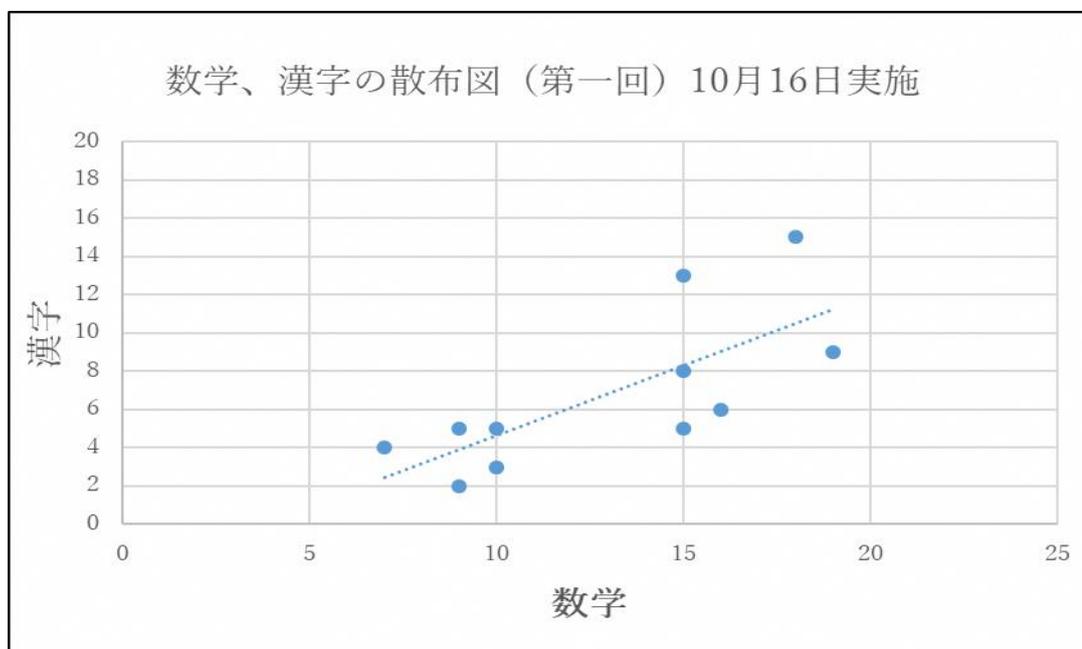
正答者数については、漢字検定7、6級相当の書き取りでは、10問中5点以上を獲得した生徒は、9名/13名中と事前テストから倍増している。5、4級相当の問題でも10問中5点以上を獲得した生徒が約半数となり、6名/13名中と上がった。漢字の学習アプリの内容は、漢字の読みだけであるが、書き取りで0点の生徒は一人もいなくなった。

生徒個人の成績をみても、事前テストが5点であった生徒が事後テストでは16点獲得したり、漢字を書くことに拒否感をもっていた生徒は、事前テストが2点であったが、事後テス

トは9点を獲得しており、変化が見られた。

イ 数学に関して

正答者数については、小学校4年生以下の問題では、12問中8問以上正答した生徒が1名を除き、12名/13名となった。小学校4年生以上の問題でも、12問中8問以上を正答した生徒が、事前テストの1名から増え、3名/13名となった。漢字と比較すると、伸び率こそ少ないが、24点満点を獲得する生徒も現れた。簡単な計算間違いや小数点の位置を間違えて解答した生徒も減少した。



ウ 学習意欲に関して

事前テストと同様に5段階評価の同項目でアンケートを行った。

回答から、勉強が好きか、得意であるかの項目では、「勉強は嫌いで、不得意である。」と11名/13名中が答え、1名は変わらず「ふつう」であったが、1名は「勉強が好きになり、得意になった。」と回答をした。この生徒は、高校に入学後、欠席がなくなり、大学進

学を目指すようになっていく。学内でも上位の成績を維持し、勉強が好きだと感じるようになったことをきっかけに多くのことに自信がもてるようになっていく。

「学力を身に付けたいし、将来何かの役に立つ(ので、勉強をしたい)」と回答した生徒は、事前テストとの結果に変化は見られなかった。しかし、普段であればすぐ諦める生徒もモチベーションを維持することができたり、自分の到達度を知り、次の段階へチャレンジしたりすることができた。取り組んだ生徒は全員、一定時間集中して課題に向かうことができていく。自由記述に書かれた学習アプリを使用した学習の感想では、「勉強ができてよかった。」「サクサクできて楽しかった。」などの前向きな感想が一部に書かれていた。

2 「通級による指導」

平成 28 年 12 月に学校教育法施行規則を一部改正し、平成 30 年度より高等学校における通級による指導が開始された。本校は、奈良県教育委員会より研究指定を受け、奈良県教育委員会事務局学校教育課及び奈良県立教育研究所と通級による指導に関する研究を進めており、昨年度 10 月からの試行を経て、本年度 4 月から生徒 6 名を対象に始めた。

(1) 対象生徒

2 年生 1 名、3 年生 4 名、4 年生 1 名 (ASD 傾向 5 名、ADHD の診断あり 1 名) の計 6 名である。どの生徒にも共通しているのは、これまでの失敗経験から自己肯定感が低く、自尊心も低い。また、ASD 傾向 5 名の主たる課題はコミュニケーションであり、特に同世代とのコミュニケーションがスムーズにいかないことが多い。ADHD の診断のある生徒は、過緊張や注意欠如があり、不安な気持ちから過度に確認作業をしてしまうという課題がある。

(2) 学習内容

個別の指導計画を基に個々の教育的ニーズに合わせた内容を取り入れている。指導においては、どのような活動や場面であっても、自己肯定感や自尊心を高めていけるよう常に生徒を肯定するように心掛けている。本校を卒業するときには、自分に自信をもち、社会の一員として主体的に自立と社会参加できることを目指したいと考えている。

したがって、通級による指導では、気持ちの変化に自ら気づき、自分の気持ちを整理できるようになるために、授業の開始時と終了時に生徒自身が「今の心の状況」を 1～5 段階で評価するとともに「今日の授業の感想」を書くようにした。

(3) 事例

ア 4 年生 生徒 A (ASD 傾向)

生徒 A は、昨年度から通級による指導を受けている。指導開始前の本人に対する聞き取りでは、「ただだらと話してしまい、まとまりがなくなってしまう。また、無理に難しい言葉を使おうとしてしまうので、相手に意図が伝わりにくくなってしまう」や「自分に自信がないので、今まで授業で発言したことはない」など自分の課題を明確に把握していた。したがって、個別の指導計画の目標には「自分の行動に自信をもち、自分の思いなどを的確に伝えられるようになる」とした。

○自己評価○

1	2	③	4	5
理由 ⇒ 先生の分かりやすい説明のおかげで、				
変えないといけない点に気付くことができたからです。				
今日の感想 自身の動画を見るのがはずかしかったです。				

学習内容「自分の意見をまとめてみよう」では、将来の就職活動で必ず必要になる自己PRを題材にした。生徒Aの強みは言語理解力が高く難しい言葉もよく知っていることだが、障害による特性から、重要な事の整理や順序立てた説明が不得手であると考えられた。そこで、まずは自分のいいところをできるだけ多く言語化し、それをグループ化してPRする内容を2つ選び出すことにした。そして、それぞれについてのエピソードを考え、エピソードの中のキーワードを3つだけメモすることにした。自己PRを話すにあたり、PR内容2つとそれぞれのキーワード3つずつの計8つの単語を覚えるようにした。言語理解力の高い生徒Aにとって単語を覚えることは比較的容易で、その順序を紙に書いて記憶することによって、スムーズに話すことができた。実際に自己PRの様子を動画で撮影し、自分で改善点はどこかを確認しながら練習をした。その結果、授業の最後にはとてもまとまりがよく的確に話すことができた。この授業の終わりの感想には、「先生の分かりやすい説明のおかげで変えないといけない点に気付くことができた。」と書いていた。

この生徒は、初めて通級による指導を受けた日の感想に「自分のようにコミュニケーションに課題がある人にとって、この授業が奈良県中の学校、日本中、世界中に広がると、ハッピーになる人が増えると思います。」と書いていた。そして、今年最後の授業では「1年半、この授業を受けて人が変わったように成長したと実感しています。僕はこの授業が大好きでした。今後もこの授業を続け、たくさんの方が僕のように自信をつけてほしいと思います。」と書いていた。この生徒は、通級による指導を受けてからかなり自信をもったようで、授業では積極的に挙手するようになり、就職試験も一社目で内定を得ることができた。さらに、卒業式では卒業生代表として答辞を読むことになっている。この生徒は、この通級による指導によって大きく成長した一人である。

イ 3年生 生徒B (ASD傾向)

生徒Bは、今年度4月から通級による指導を受けている。通級による指導を始める前の聞き取りでは困っていることとして「物の管理ができない」と言っていた。また、チューター(担任)からは「コミュニケーションに課題があり、同世代とスムーズなコミュニケーションがとれない。本人はそれに気付いていない。」と課題を挙げた。したがって、個別の指導計画では「自己の理解を高め、自己管理ができるようになる」「適切な人間関係を築けるように、適切なやりとりを身に付ける」とした。

学習内容「自己管理」では、サイズ、月表示か週表示か、日曜始まりか月曜始まりか、時間ごとに記載できるものか、日ごとに記載するものかなどを自分で選び、オリジナル手帳を

作成した。手帳には、今後の予定やメモを書くことにし、常にカバンに入れておくことを約束した。その後も今後の予定やメモを書いており、継続して活用してくれている。

学習内容「状況に応じた対応」では、通級担当者によるロールプレイで、C、Dの2人が話をしている横をEが通りがかったとき、CはDと話の途中にも関わらず、Eに話しかけるという状況を見せた。これは生徒Bが普段してしまう行動である。ロールプレイを見た生徒BはCが「『状況に応じた対応』をできていない。」「Dがかわいそう。」と言った。その後、Cが自分と似ていることに気付いた。他にも「状況に応じた対応」を想定した学習に取り組んだ。また、毎週の通級による指導でコグトレ(認知機能強化トレーニング)を繰り返してきたため、少しずつ自分を客観視できるようになったり、自分の言動にブレーキをかけることができるようになったりし、「状況に合わせた対応」ができるようになったと考えられる。

○授業の感想○

今までの行動もしているから、社会に出た時に、またダメな行動だから、これから気をつけて行動して、こうと思った。

初めてコグトレをしたときの自己評価

自分の得意を見つけよう
7月2日 クラス 11F 名前

◎プリントに取り組んだ後、あてはまるところに○をつけましょう。
※見本「得意」と感じた場合

① 覚える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
② 数える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
③ 写す	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
④ 見つける	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
⑤ 想像する	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意

◎一番得意なものは①～⑤のうちどれですか?
④

11月にコグトレをしたときの自己評価

自分の得意を見つけよう
11月19日 クラス 11F 名前

◎プリントに取り組んだ後、あてはまるところに○をつけましょう。
※見本「得意」と感じた場合

① 覚える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
② 数える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
③ 写す	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
④ 見つける	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
⑤ 想像する	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意

◎一番得意なものは①～⑤のうちどれですか?
①

○授業の感想○

全部得意になったからうれしい。想像弱かできてよかった。

また、次も全部得意になるおにがいはる

- (4) 奈良県立教育研究所の協力のもと、以下を作成
- ア 高等学校における通級による指導の手引き書
 - イ 高等学校における通級による指導の対象生徒校込に使用する実態調査チェックリスト
 - ウ 高等学校における通級による指導のシラバス

IV 検討会議

1 第1回検討会議 令和元年11月18日(月)

- (1) 委員長選出
- (2) 本事業の説明と質疑応答
 - ア 「通級による指導」の進捗状況
 - イ 「ICT機器を活用した学習」の進捗状況
- (3) 「通級による指導」の授業見学

2 第2回検討会議 令和2年2月14日(金)

- (1) 本事業の進捗状況報告を受けての質疑応答
- (2) 各委員からの意見
 - ア 「通級による指導」において、生徒一人ひとりへの課題に対し、どのようなねらいで、どう言葉かけるのかなどをよく検討しているようであるが、今後は言葉かけや表情などの文字化されていないところも成果として評価し、記録していくことが大切である。生徒の自己理解を進めるためにも、全生徒にセルフチェックシートの記入を検討してはどうか。生徒の困っているところを具体的に把握することも可能になると思われる。
 - イ 「通級による指導」を普及させていく中で、履修や修得など弾力的に行っていくことの検討を続けてほしい。

「ICT機器を活用した学習」では、目標・計画・指導・評価の一連の学校教育活動を個別に課題設定し、どのように評価をするのか、個別に行う課題をどのようにモニタリングし、評価をするのかの検討が必要である。
 - ウ 「ICT機器を活用した学習」などデジタル化を教育に取り入れるメリットがある。まず、記録(履歴)が取れることで、ルールや法則性が分かる。それらを学習分野に応用させることも可能である。一律の学習方法になじまない生徒にも個々に合わせてカスタマイズしやすい。一般化しやすいことは、困っている点、苦手な箇所にも対処できる。文部科学省も手引書を作成するなど、ICT機器を活用した学習効果に期待をしている。その先駆けとなる事業でもある。
 - エ 「通級による指導」と「ICT機器を活用した学習」は、ツールは異なるが、どちらも自尊感情を高めるための取組である。「総合的な探究の時間」に自己理解の内容に関する取組を継続して効果を確かめてほしい。

V 次年度に向けての課題と取組

1 「ICT機器を活用した学習」

今年度の生徒の学習の様子を見ると、「数学」については、取組を始めるものの、すぐに挫折して「漢字」の学習に移る生徒が多かった。生徒に尋ねると、「数学(算数)は難しい。」「解くのに時間がかかる。」を理由に掲げていた。漢字の学習は「読み」であったので、短時間で多くの問題に取り組めたことが楽しかったようであった。

学習アプリを自宅でも活用できるように生徒個人の携帯電話でもログインさせたが、ほとんどの生徒は自宅での活用までには至っていない。1名の生徒は、冬期休業中にも何度かアプリを活用し、学習に取り組んでいた。この生徒は学習に魅力や楽しみを見出したようであり、英語検定に挑戦するための単語ノートの作成を始めている。今後、生徒の興味・関心をより高め、学習時間の増加につなげることができるよう工夫を加えていきたい。

またICT機器の活用については、学習アプリによる基礎学力の向上以外にも、各授業におけるグループ学習での活用や様々な生徒の学習において効果的な活用を進めていきたい。

次年度に向けた課題は、次の4点と考える。

- ・学習意欲を高める取組
- ・学習時間を増やす取組
- ・「数学」の基礎学力を培う取組
- ・ICT機器の様々な場面での活用

2 「通級による指導」

(1) 集団指導

今年度はすべての講座を個別指導で行い、内容に応じて集団指導を取り入れた。来年度は卒業年生の集まる講座で集団指導を試み、集団指導における指導形態や指導内容の充実に努めたい。

(2) 「通級による指導」担当者の育成

校内の体制が整備され、教員内の「通級による指導」に対する理解も深まり、受講生徒も来年度は対象生徒が16名に増加した。卒業予定年次生3名の受講する講座以外は個別指導を予定しているため、授業時間数も大幅に増加する。現在は専任教員1名、兼任教員2名で指導しているが、来年度は、加えて1名の兼任教員が必要となる。再来年度以降はさらに「通級による指導」の受講生徒が増えると考えられることから、より多くの「通級による指導」担当者の育成が必要である。来年度は1名以上の兼任教員を育成し、「通級による指導」の拡充を目指したい。